

対象とした現在進行系の研究を紹介している。

最後の第9章では、「いまを旅する磯魚たち」と題して、磯焼けにより変わってしまった海の森の現状や、アイナメが人工礁に集まる理由などを明らかにした研究を紹介している。世界中の北の海を潜ってきた著者だからこそ提言できる、身近な漁港の環境保全の必要性を知ることができる一節である。

本書には豊富な水中写真が掲載されている。これらの写真のほとんどは、著者のカジカチームの一人であり、水中カメラマンの佐藤長明氏によるものである。美しい魚たちの写真が、遠い北の海の魚達を身近なものにしている。また、本書には随所にQRコードで読み取ることができる動画へのリンクも

掲載されている。ケムシカジカやアイナメ、セトヌメリの産卵行動や、著者らが開発した稚魚用サンプリングマシンを用いた調査風景を手軽に見ることができる。

著者が仲間たちとともにカジカやアイナメなどの身近な北の魚を対象に繰り広げる冒険に、読者は夢中になることに違いない。魚の研究に興味のある中高生をはじめ、普段北の魚に縁の少ない皆様にもこの本をおすすめしたい。

(伊藤 玄 Gen Ito : 〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 岐阜大学教育学部 e-mail: sakurahayabusa6647@gmail.com)

## 図書紹介・New Publications

魚類学雑誌 67(2):298-299  
2020年11月5日発行

マンボウは上を向いてねむるのか。—澤井悦郎(著)。2019。ポプラ社、東京。205 pp. ISBN 978-4-591-16351-1。1,400円(税別)。本書は「マンボウ博士」こと澤井悦郎氏の2冊目のマンボウ類の解説書。多くの漢字にふりがなが使用されており、幅広い年齢層の読者を想定された平易な文章で書かれている。しかし、「わたしは読者のみなさんが小学生であろうと手加減はしません」と書かれているとおり、最新の知見や未発表データに基づいた解説は、本会会員にとっても読み応えがあるだろう。

内容としては、著者のこれまでのマンボウ属魚類の分類学的研究と、市民研究者をまきこんだ水族館でのマンボウの行動観察がメインとなっている。前半は2017年に出版された著者の前作「マンボウのひみつ」(岩波書店)と一部内容が被るところもあるが、それ以降の新知見も多く紹介されている。第1章「わたしがマンボウ博士になるまで」、第2章「カクレマンボウを公表せよ」、第3章「マンボウ属は3種いる」が、これまでの著者のグループによるマンボウ属魚類の分類学的研究とその裏話である。著者の個人的なエピソードを交えながら、マンボウ属魚類を例に分類学の基本からわかりやすく解説されている。かつて認識されていた「マンボウ」のように、これまで1種と思われていたものが遺伝的な分析をすると複数種含まれていた、ということは珍しいことではない。しかし、どの種にどの学名を適用するのかとすることを明らかにするのは意外と骨の折れる作業であり、関連する過去の原記載やタイプ標本を全て調査する必要がある。マンボウ属魚類は大型であることに加え、古くからさまざまな学名が付けられてきた経緯があり、世界中に散らばるタイプ標本を調べるには多大なる苦労が想像できる。個人的にはタイプ標本をめぐる研究の裏話的なものを期待していたのだが、残念ながら触れられている部分は少なかった。しかし、著者らのグループが発見した第3のマンボウ属魚類、カクレマンボウをめぐる研究紹介は、海外での調査や論文執筆の分担方法など、スピード感のある展開で若手研究者には研究の進め方の参考になるかもしれない。これらの章では、学術研究の意義や研究者の

裏話的なエピソードもスパイス的にちりばめられており、一般社会からすると謎の多い研究者の生態についても知ることができるだろう。研究者の立場から言うと、いわゆる「あるある」で、一人で笑いながら読み進めることになる。ただ、近年大きな問題となっているポスドク問題について生々しく書かれており、「博士には職がほとんどありません」、「博士になりたいのなら・・・(中略)・・・ある程度人生を捨てる覚悟をして下さい」というのは、著者の感じている事実とはいえ、これから研究者を目指す小中高生を萎縮させない心配である。今の小中高生が大学院へ進むかどうかを考えるころには「ポスドク問題」もある程度解消されていることを期待したい。

後半の第4章「水族館は『生きた博物館』」、第5章「マンボウを飼いたいんですけど」、第6章「水族館で、新しいマンボウ研究が始まった」、第7章「マンボウは上を向いてねむるのか」は、水族館を舞台にした行動観察研究が紹介されている。我々は水族館の役割について少なからず知っている「つもり」であるが、一般社会では十分に理解されているとはいえない。また、本書で指摘されているように、現実問題として水族館でなかなか研究に時間が割けないということもあるだろう。そのような状況で著者が水族館とタッグを組み、さらにいわゆる「市民研究者」を巻き込むことで24時間の行動観察を行ったことは、研究を進めるアイデアとして大変興味深い。このような研究の進め方は、一般社会に水族館の役割を理解してもらえる機会をあたえるだろうし、人手不足に悩む研究者や水族館にとってもプラスになるだろう。ここでも、行動観察をすることに至った経緯や実際の観察に伴う苦労話がテンポよく語られており、読み手を飽きさせない。残念ながら、行動観察に関しては論文化されていないが、夜にマンボウが上を向いて泳ぐ頻度が高くなることなど示唆に富んだ知見が紹介されており、これからの研究と論文としての公表に期待したい。

本書は一般書ではあるが、最後に参考文献のリストを掲載したウェブサイトへのリンクが書かれている。一部の説明はわかりやすさを優先させているためか、やや正確性に欠けるところがあるように感じたが、このような工夫がされていることで情報源となる論文にたどり着くことが可能となっている。

この試みは本書の価値をより高くしているものと言えるだろう。近年、さまざまな SNS が利用可能になったことで、研究者が社会と相互のつながりを持ちやすい時代となってきた。本書を読んでいると、著者も自身のマンボウ研究を（本書でも紹介されている）SNS を通じて積極的に発信しており、それを通じて講演会や生物関係の展示イベントにも参加している様子もうかがえる。実際、行動観察を共にした市民研究者は著者の関係するイベントの常連であったり、あるいは SNS で得られた情報から著者の学術論文の公表に至った例もあるようだ。研究成果を一般社会に還元することを強く求められる時代において、SNS を積極的に利用している著者の研究スタイルは、個人的には斬新であった。そのような角度から本書を読んでもみるのもいいかもしれない。

(甲斐嘉晃 Yoshiaki Kai : 〒 625-0086 京都府舞鶴市長浜 京都大学フィールド科学教育研究センター 舞鶴水産実験所 e-mail: mebaru@kais.kyoto-u.ac.jp)

義や動向、活用例を紹介した書籍である。以下のように序論と3部9章から構成されており、幅広い分野（もちろん魚類関連のトピックスもあり）での実例が紹介されている。序論：自然史・理工学デジタルアーカイブの今日的意義。第1部 研究データの活用における：第1章 科学データのデジタルアーカイブにおける必須条件「オープンデータ」；第2章 研究データ利活用の国際的動向—世界の自然史・理工学 DA 活用。第2部 自然史・理工学 DA の社会的活用；第3章 オープンサイエンスと天文学—現状と課題；第4章 自然史博物館×デジタルアーカイブ—オープンサイエンスを拓く一例としての魚類写真資料データベース；第5章 自然史情報のデジタルアーカイブと社会的問題への利用—地球規模生物多様性情報機構 (GBIF) の機能とそのデータの活用；第6章 環境学×教育—森の感性情報アーカイブ・サイバーフォレストを用いた環境教育。第3部 自然史・理工系研究データの学際的利用；第7章 南方熊楠データベース—文理統合・双方向型デジタルアーカイブ；第8章 異分野融合で切り拓く歴史的オーロラ研究—オーロラ 4D プロジェクトの経験から；第9章 東京大学工学史料キュレーション事業の展開—工学・情報理工学図書館を実例に。序論や第4章、第5章では、自然史博物館等における標本データベースや魚類写真資料データベースでの例が紹介され（これらもデジタルアーカイブ）、他章でもデジタルアーカイブを用いた環境教育やオープンデータの考え方、オープンサイエンスの例など、教育や研究に関連する情報が多数含まれている。発想や認識革新の一助になると思われるので、デジタルアーカイブにあまり接してこられなかった方にも手に取って欲しい書籍である。

(中江雅典 Masanori Nakae : 〒 305-005 茨城県つくば市天久保 4-1-1 国立科学博物館動物研究部 e-mail: nakae@kahaku.go.jp)

魚類学雑誌 67(2):299-299  
2020年11月5日発行

デジタルアーカイブ・ベシックス 3 自然史・理工系研究データの活用。—井上 透 (監修)・中村 覚 (責任編集)。2020。勉強出版。千代田区。240 pp. ISBN 978-4-585-20283-7. 2,500 円 (税別)。近年に飛躍的な広がりをみせているデジタルアーカイブの世界を俯瞰するシリーズの第3巻 (全5巻予定) であり、自然史・理工系研究に関するデジタルアーカイブの意

## 会員通信・News & Comments

魚類学雑誌 67(2):299-300  
2020年11月5日発行

### Tylosurinae および Beloninae に適用する 標準和名の提案

ダツ科 Belonidae について系統分類学的研究を行った Toyama et al. (2020) は、形態データを用いて本科とその近縁群の系統関係関係を推定し、分類体系の再構築を行なった。ダツ科は従来は単系統群とされ、サンマ科 Scomberesocidae とともにサンマ上科 Scomberesocoidae を構成すると考えられてきたが (Nelson et al., 2016 ; Collette and Bemis, 2019), Toyama et al. (2020) は従来のダツ科が非単系統群であり、サンマ科がそこに内包されることで単系統群となることを示した。彼らが提唱した分類体系では、ダツ科に Tylosurinae Starks, 1906 および Beloninae Bonaparte, 1835 の 2

亜科を認め、前者にはハマダツ属 *Ablennes* Jordan and Fordice, 1887, *Potamorhaphis* Günther, 1866, *Pseudotylosurus* Fernández-Yépez, 1948, ダツ属 *Strongylura* van Hasselt, 1824, テンジクダツ属 *Tylosurus* Cocco, 1833 および *Xenentodon* Regan, 1911 の 6 属を、後者には *Belone* Cuvier, 1816, サンマ属 *Cololabis* Gill, 1896, *Elassichthys* Hubbs and Wisner, 1980, *Nanichthys* Hubbs and Wisner, 1980, *Petalichthys* Regan, 1904, ヒメダツ属 *Platybelone* Fowler, 1919 および *Scomberesox* Lacepède, 1803 の 7 属を含めた。南米産の淡水性小型種である *Belonion* Collette, 1966 については亜科の帰属不明とした。

これら 2 亜科はどちらも日本産の属を含むため、日本国内での意思疎通には両亜科を標準和名で呼称するのが簡便かつ実用的である。しかし、これまで両亜科に対して標準和名は提唱されていないため、これらを新たに提唱する必要がある。*Belone* をタイプ属とする Belonidae が「ダツ科」